

# 薬剤師 在宅医療で活躍



在宅患者に持って行く薬を確認する  
薬剤師＝広島市中区舟入南4丁目

## 患者宅へ薬配達 処方箋を医師に提案も

家で暮らす患者を様々な専門職が支える在宅医療は年々広がっている。これまでは薬局のカウンターにいるイメージの強かった薬剤師も外に出るようになった。在宅ケアに力を入れる薬局「ホロン」（本社・広島市中区）の取り組みを取材した。

ホロンが運営する薬局チエーン「すずらん薬局」大手町店の薬剤師の若宮香織さんが10日、広島市南区の一軒家を訪れた。週1回、男性患者(87)に薬を届けている。男性は下半身が不自由で、妻(80)や訪問看護師、訪問ヘルパーらの世話を受けながら、ベッドで1日の大半を過ごす。

食事代わりに、栄養剤を点滴で体に入れていく。1袋約2キロの栄養剤の袋を1週間分まとめて薬局に取りに行くのは難しいため、若宮さんが車で運ぶ。この日は災害などの非常時に備え、「お薬手帳を避難袋に入れておいて下さい」と助言。ポンプの非常用の電源に、電池を持っておくこともつけ加えた。「薬のことなら何でも知っているのだから、何でも聞ける」と、男性は話す。

薬の処方箋は、患者を診ている医師の処方箋に沿ったものだが、若宮さんは、患者の症状や訴えなどから「こんな薬を使ったらどうか」と、医師に提案することもある。

「すずらん薬局」は昨年未までに約1260人の在宅患者をみてきた。末期のがん患者が痛み止めに使う医療用麻薬を調合したり、栄養剤を独自に作ったりする無菌調剤室も持つ。旅行を望む患者の薬の携帯に関する相談にも乗っている。

末期のがん患者の緩和ケアへの対応は、まだ経験のない医師も少なくない。薬剤師が支えることで、家に帰れる患者が増える」と古屋憲次社長。

ただ、薬ひとつとついても、「病院仕様」の医療が中心だという現実がある。例えば、末期のがん患者の痛みを和らげる医療用麻薬を体内に送り込むポンプ。これまで緩和ケアは病院中心。ポンプは一つ数十万円もする。患者が使う期

間は数週間から3カ月。買うには高すぎるが、ポンプがあれば、家に戻れる患者もいる。すずらん薬局では3台ほど購入し、呉や東広島などの診療所にも要望があれば有料で貸している。

ピアノを弾き、先生と一緒に音楽療法に取り組む宮崎真理子さん＝島根県益田市横田町



## 音楽とのつきあい方

- **食わず嫌いな**  
同じジャンルだけでは、気持ちにあう曲が見つからないことも。テレビコマーシャルやドラマで気に入った曲を調べたり、友人らと情報交換したりして、テナを張っておく
- **気持ちにあった曲を選んでストレス軽減**  
気分と正反対の曲は逆効果。寄り添ってくれる曲にひたろう
- **歌って発散**  
カラオケでリズムや歌詞に乗せて、自分の気持ちを外に表現してみよう
- **楽器に挑戦**  
最近は大人向けの音楽教室も盛ん。指使いから始めて、簡単な曲の演奏まですすめば大きな達成感も

※広島国際大学の小坂哲也教授の取材から



元気になるように、あえてアップテンポの曲を聞くと逆効果に。「焼き肉を食べたいのに刺し身が出てきたような違和感から、耳が閉じてしまう」（小坂教授）ようになる。

ただ、悲しい曲ばかり聞いているのもよくない。しっかりとしながらも前向きな歌詞や明るい曲調のものへ徐々に変えていくことで、

(広川)